

社会福祉における歴史研究の意義

渡邊 暁

Significance of Historical Research on Social Welfare

Satoshi Watanabe

Abstract

Practice is important for social welfare, therefore, it is natural that most of researchers focus on the current situation analysis.

However, it is essential that social welfare practitioners have to perform their duties, having the basis of practice by learning history and developing their own belief under the firm understanding of history.

And as to the social welfare research, it is necessary to sufficiently reflect historical analysis as basis, without giving too much weight to the technical methodology and theory. (As to the social welfare research, the theory and methodology have to be reflected on the historical analysis as basis, without getting distorted research that gives too much weight to skills.)

Then, in this paper, I organize the issues of historical research on social welfare of predecessors, and try to have some consideration of historical study of social welfare.

Key words; Social welfare, History, Memory, Experience of "face"

はじめに

池田敬正 (2002) ¹⁾ は社会福祉研究について、その研究が「現状分析が中心となり、歴史と規範の分析を無視する傾向をもたらす。そのため倫理問題や公共性を追求する姿勢を後景に退け、些細な職業的専門主義が幅を利かすといわれる状況をもたらす。」と指摘している。さらに、「現状分析こそが社会科学の目的であるが、歴史や規範の分析により基礎づけることなくしては、その目的を人類史的に位置づけ人間としての普遍的理念にもとづかせることを困難にし、学問としての科学性を欠如させる」と示唆している。

また、杉山博昭 (2010) ²⁾ は、現在の社会福祉史研究が危機的な状況にあるとした上で、「歴

史軽視の風潮は、実践の理解を平板なものにし、長期的には実践者の質の低下をもたらし、社会福祉全体を地盤沈下させることにもなる。歴史学とも連携しつつ、社会福祉の歴史研究を支えていくことが強く求められている。」と主張している。

社会福祉は実践が大切であるから、現状分析を研究の中心に据える研究者が多いことは当然のことといえる。しかし、社会福祉は実践の学問で有るがゆえに、歴史を学ぶことで自身の実践の基礎を持ち、確固たる歴史認識の下で信念を培い、社会福祉業務にあたることが肝要と考える。社会福祉研究についても、理論や方法論を技術面に偏することなく、基礎としての歴史分析を十分に反映させたものである必要がある。そこで、本稿では先達らの社会福祉における歴史研究の論点を整理し、社会福祉の歴史研究の意義について若干の考察を試みる。

1. 歴史と記憶からの学び

「歴史とはなんだろうと聞かれるとき、『それは、大きな世界です。かつて存在した何億という人生がそこに積みこまれている世界なのです。』と、答えることにしている。

私には、幸い、この世にたくさんのすばらしい友人がいる。歴史の中にもいる。そこには、この世では求めがたいほどにすばらしい人たちがいて、私の日常を、はげましたり、なぐさめたりしてくれているのである。」(司馬, 1998)³⁾ 司馬の想念が凝縮されている。

歴史に対する理解の仕方は多様である。歴史とは何か。「よく『歴史は鏡(鑑)である』といわれる。歴史を学ぶことによって、自分が生きていくための教訓や処世術を会得することによって、歴史に『かがみ』つまり手本や模範としての役割を期待するのである。」(末永, 2002)⁴⁾ 歴史を知ることによって、私たちは現代で生きていく為の勇気や教訓、指針を得ることができる。

歴史の中の法則性を理解する視点も重要である。歴史は繰り返すといわれ、他方において歴史の一回性が強調される。古川孝順(2008)⁵⁾ は、歴史のなかに再現性という性格と一回性という性格があるとした上で、この性格のいずれかに重要性を認めるべきということではないと主張して以下のように述べている。

「歴史のなかには再現性と一回性が同時に存在しています。ただ、再現性といっても文字通り完全に同じ状況が繰り返されるということはありません。繰り返されるのは人びとの行動にみられるある種の型、パターンであり、そこに含まれる内容はそのときどきの社会的、経済的、政治的、文化的な諸条件によって規定され、方向づけられ、一つとして同じことの繰り返しではありえません。歴史は、そのような意味において、一回性の強い内容を含みつつつきつきに生起するある種のパターンの繰り返しとして形成されます。その限りにおいて、歴史は、経済、政治、文化に関わるある種のパターンの時間軸を中心とする螺旋的な推移、展開の過程として認識することができるように思います。」

歴史は一回性をもつ出来事やエピソードの連続体であると認識することが肝要なのであろう。

このように、歴史の中に法則性を見出すことは大切であるが、それだけではない。近年、歴

史とは異なる「記憶」というテーマが注目されている。90年代より歴史学者の間では、“歴史対記憶”を論点に論争が巻き起こり、記憶に対する歴史の位置づけについて論議されている。また、歴史学の世界だけでなく、テレビや新聞で「戦争の記憶」「記憶の戦争」というフレーズでの報道が多くなされている。確かに歴史の記憶を語る時、戦争はその最たるものであろう。

「戦争はいかなる大義名分があろうとも残酷なものだ。悲惨なものである。その被害を一身に受けとめなければならぬのは、ごくごく普通の、名もなき一般市民なのに、その市民が好戦気分が満たされていく。それが明治維新以来の戦争経験で得た私たちの一番大切な“負の記憶”—教訓であるはずなのに、この六十年の平和の中で最も大事にして来た記憶がジグザグと溶け始めているのだ。」(鳥越, 2006)⁶⁾

人間の愚かしさ、痛みと苦しみ、絶望、無念の想いで亡くなっていった人びとの負の記憶を、社会福祉こそは決して忘れることなく、語りついでいく必要がある。

2. 歴史研究のあり方とは

私たちの実践が、なんらかの信念の上で、なんらかの世界観に根をおろしていなければならないとすれば、過去から未来にわたって、我々を結びつけている歴史を考える。つまり歴史は、私たちの実践に基礎を与え、世界観の基礎となっていることが理解できる。

細井勇(2009)⁷⁾は、「歴史研究において、実証主義的態度は、あくまで前提であって、一定の価値志向性において、過去の中に現在を、現在の中に過去を読み取っていく感性的ないし創造力が歴史研究には欠かせないのではないだろうか。歴史研究とは、なにがしかの歴史観、世界観の提示に通じていくと考える。」と述べている。この歴史研究の考え方は、歴史家ダールマンの「歴史についての知識がいくら豊富に盛りこまれていても、それだけではすぐれた歴史書とはいえない。本当にすぐれた歴史書とは、過去についての知識が、現在を生きるための情熱や思想としっかりと結びつけられているものである」(末永, 2002)⁸⁾との言葉に連動する。過去の出来事についての知識が、単なる知識で終わらず、今を生きている人びとの日々の実践の支えとなるような思想にまで高められていくこと—これが、すぐれた歴史研究の条件であろうし、ここに私たちも歴史を通して、現在をいかに生きるべきかという問題意識を汲み取っていかねばならないのである。

ところで思想家・哲学者であるヴァルター・ベンヤミンの「歴史の概念について」の中に書かれている「歴史の天使」は、多くの歴史学者により論文中に取り上げられているが、社会福祉事業史を考える上でも大きな示唆を与えてくれる言説である。以下まとめて記す。

「その天使は、『進歩の強風』にあおられて、翼を閉じることができずにひたすら歴史を未来方向へと進んでゆかざるをえない。かろうじて顔だけは過去の方角に向け、進歩の過程で打ち捨てられて瓦礫の山をなしている過去の事象へとまなざしを投げかけることができるだけなのだ。

よく知られているこの比喩的形象によってベンヤミンが示そうとしたのは、進歩・発展を旗印にする時代風潮によりそのつど古びたとして廃棄されるもの、しかも進歩にはなんら寄与し

なかったとして、歴史の発展過程のなかに位置を与えられることもなく忘れ去られてゆくものへの、愛惜の念にはかならなかった。もちろんそのような想いとは無関係に、過去がいかに積み重なっていても『天使』ならぬ人間は、もはや過去の人びとの敗北の歴史、死屍累々たる瓦礫の山に目をくれようとしなないであろう。」(鹿島, 2006) ⁹⁾

日本の近現代における社会福祉の歩みは、明治期の富国強兵、殖産産業、産業革命というキーワードを基に近代化政策を推し進めたことによる進歩の嵐によって、打ち捨てられた社会的弱者への救済活動から始まった。そして、先の戦争の世紀、「膨大な人々の尊い生命を奪い、あるいは傷つかせ、一家を離散させ、親や子を奪い、生活を貧困のどん底に突き落とし、人間としての希望と願望を根底から否定する悲人間的・反福祉の状況をつくりだした」(室田, 2003) ¹⁰⁾ ことへの歴史的反省の上に成り立ち、今世紀を歩んでいる。ここに、社会福祉の原郷があると考えてよいのではないだろうか。私たちは、もっとこの原郷に目を向ける必要がある。

3. 「顔」の体験をした人びと

何が社会福祉の歴史を切り開いてきたのか。中村剛 (2010) ¹¹⁾ は、「人と人との関係性＝他者への責任」について着目し、哲学者レヴィナスの「顔」の体験について以下のように紹介している。

顔の体験というのは、「道で飢えて痩せ細った子どもと出会い、その子の顔を見たとき、私たちは石ころを見たのとは同じように無関心ではいられず、支援する／しないにかかわらず、心の中に何か“ざわめき”のようなものを覚える体験のことをいう。この体験は、「私は私、他者は他者」という孤立した人間理解を解き放ち、私を他者へと開ききっかけとなる。そして、この体験が人を支援へと駆り立てる。」

その上で中村は、「顔」の体験の実例として、日本で最初のハンセン病患者の施設である神山複生病院を創設したフランス人の宣教師であるテストウイド神父について以下のように述べている。

「テストウイド神父が東海道を徒歩で布教している途中、御殿場あたりで、30歳くらいの夫に捨てられた女性が水車小屋の片隅にあるわら屑のなかで呻いている様子を見て心を痛めた。ハンセン病患者が土蔵に閉じ込められ、人間として扱われていない例を目に思い浮べ、そしらぬ顔をしてこの女性の傍を通り過ぎてはならないと、自分に言い聞かせた」という態度は、人と人との関係性と無関心ではいられない人間の在り様を示している。

また、「岡山孤児院」を創設した石井十次が、巡礼中に夫と末子に死別された女性と男子の貧しい身なりの姿を目の前にして、女性の懇願を受け入れて男子を引き取ったことも、レヴィナスのいう「顔」の体験と同様のものといえるのではないか。

近年においても、宅老所や認知症高齢者グループホームを立ち上げる端緒として「顔」の体験をした事業主は多い。たとえば、「宅老所よりあい」の下村恵美子 (2001) ¹²⁾ の体験もこれにあたると思われる。

『老人ホームはそう悪いとこじゃないですよ』と言い始めたら、ジーンと睨みつけられました。そして、『私はここでのたれ死にする覚悟で生きとる。あんたに何の関係があるのか。いたらんこったい』と言われました。曲がりきった腰を精一杯伸ばしてピシヤリと返した言葉です。その一言に私はしびれ上がりました。のたれ死ぬ覚悟で九十二歳のばあさまが生きとる。このばあさまの、のたれ死ぬ様を私は見てみると後悔を残す、と思いました。』

この体験があり、宅老所を設立したことにより、その後全国に宅老所や認知症高齢者グループホームが広がっていくこととなる。

社会福祉は「顔」の体験（または、小倉襄二の言葉である“底辺に向かう志”）によって、慈善事業を興した福祉の先駆者たちの活動によって切り拓かれた。先駆者たちは、必死に祈り、思考し苦悩する中で、困難の中にあっても明るい意欲を持って事業を推し進めていった。私たちはこの先駆者たちの魂魄に大いに学ばねばならない。

おわりに 自分のなかに歴史をよむ

木原活信（2004）¹³⁾は、論文『ソーシャルワーク実践への歴史研究の一視角』において、中世ヨーロッパの社会史研究の権威である歴史学者阿部勤也の「自分のなかに歴史をよむ」という言説を紹介している。以下まとめて記す。

「阿部にとって『自分のなかに歴史をよむ』とは具体的にいうと、極めて個人的な原体験に遡る。それは、家庭の事情で彼がヨーロッパの国が創設したカトリック系の児童養護施設（修道院の一部）で過ごした特殊な個人的な出来事であった。そこで出会ったヨーロッパの神父やシスター、そしてその修道院の醸し出す日常生活や雰囲気一つひとつの記憶が、説明はつかないが脳裏に焼きついたという。そして時間をかけて彼自身がそれを自分に納得がいくように説明していくために一つひとつ言語化させる過程（森有正の言葉では「経験化」）が、中世ヨーロッパのキリスト教の社会史という歴史研究のテーマそのものとなるのである。彼の少年時代の「ヨーロッパ体験」という特殊な原体験がまずあり、それを懸命に自問自答していく過程からやがて学問としての問題意識が芽生え、それを説明していこうとする過程が必然的に自己の内面へと向かわせ、結果的に自分を深く掘り下げていこうとする態度になっていった。」

阿部勤也のこの歴史の視角は、「私にとって歴史は自分の内面に対応する何かなのであって、自分の内奥と呼応しない歴史を私は理解することができないからです」¹⁴⁾との言葉に集約されている。自身の原体験を懸命に問いかけていく過程から学問としての問題意識が現れ、そのことを説明する試みが、必然的に自己の内面へと向きあうことになり、結果として自分を深く掘り下げていくことになる。この自己のエートスを深める営みは、石井十次や留岡幸助、山室軍平を代表とする慈善事業家たちが、明治期の産業革命期、その影で過酷な生活にあえぐ人々を目の当たりにし、社会の現実の壁に立ち向かうなかで自身の原風景の影響を受けながら、内奥を真摯にみつめ、思想的変遷を果たしていったことと共通するといえよう。

私たちを成立させているものは、それまで出会った人たちである。そして、歴史の記憶や物語を意識して、また無意識にたどっていくことで私たちは形作られている。「自分のなかに歴

史をよむ」こと、つまり「自分のなかの内奥に鼓動する世界からの出発」を説く視点を強く意識して、「人と共に生きる場で、自分に出会うという経験から形成される哲学」を求め、歴史観を深めていくこと。社会福祉における歴史研究の意義のひとつは、ここにあると考えられる。

[注]

- 1) 池田敬正 (2002) 「第2章 歴史における社会福祉」『二十一世紀の社会福祉をめざして』ミネルヴァ書房 57頁
- 2) 杉山博昭 (2010) 「社会福祉史と歴史学 —池田敬正『日本社会福祉史』以降」『歴史評論』9月号校倉書房 73頁
- 3) 司馬遼太郎 (1998) 『人間というもの』PHP 研究所 54頁
- 4) 末永清 (2002) 「第3部 『生きるための歴史』を求めて」『新しい史学概論』昭和堂 173頁
- 5) 古川孝順 (2008) 『社会福祉研究の新地平』有斐閣 267頁
- 6) 朝日放送編 (2006) 「序にかえて 鳥越俊太郎」『語りつぐ戦争—1000通の手紙から』東方出版 2頁
- 7) 細井勇 (2009) 『石井十次と岡山孤児院』ミネルヴァ書房 46頁
- 8) 末永清 (2002) 前掲書 158頁
- 9) 鹿島徹 (2006) 『可能性としての歴史—越境する物語り理論』岩波書房 66頁
- 10) 菊池正治・室田保夫編 (2003) 『日本社会福祉の歴史 付・史料』ミネルヴァ書房 1頁
- 11) 中村剛 (2010) 『社会福祉学原論—脱構築としての社会福祉学』みらい 92頁
- 12) 下村恵美子 (2001) 『九八歳の妊娠—宅老所よりあい物語』雲母書房 67-68頁
- 13) 木原活信 (2004) 「ソーシャルワーク実践への歴史研究の一視角—『自分のなかに歴史を読む』こととナラティブの可能性をめぐる—」『ソーシャルワーク研究』vol. 29, 相川書房 13-14頁
- 14) 木原活信 (2004) 前掲書 13頁

[参考文献]

- 阿部勤也 (1987) 「『過去へ向かう心』とは何か」『歴史学研究』574号 青木書店
- 阿部志郎・河幹夫 (2008) 『人と社会—福祉の心と哲学の丘』中央法規
- 井垣章二・小倉襄二・加藤博史・住谷馨・同志社大学社会福祉学会編 (2004) 『社会福祉の先駆者たち』筒井書房
- 岡真理 (1999) 『記憶／物語』岩波書店
- 小倉襄二 (1996) 『福祉の深層—社会問題研究からのメッセージ』法律文化社
- 木原活信 (2005) 「自分史と福祉実践—対抗文章としての記録 (ナラティブ・リコード) について—」『ソーシャルワーク研究』vol. 31, No. 3 相川書房

- 合田正人（1999）『レヴィナスを読む（異常な日常）の思想』NHK ブックス
中村剛（2009）『福祉哲学の構想—福祉の思考空間を切り拓く』みらい
中島健蔵（1957）『昭和時代』岩波新書
野家啓一（1996）『物語の哲学—柳田國男と歴史の発見』岩波書店
林尹夫（1967）『わがいのち月明に燃ゆ』筑摩書房